

テーケイ博士と会見して

著者	小林 文男
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	14
号	8
ページ	51-57
発行年	1973-08
出版者	アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00052601

テーケイ博士と会見して

こ ばやし ふみ お
小 林 文 男

I

私がハンガリーの首都ブダペストを訪れ、テーケイ・フェレンツ博士と会見したのは、昨年（1972年）末、12月10日のことであった。わが研究所で「アジア的生産様式論をめぐって」の第1回シンポジウムが開かれたのが昨年10月、しかし、この時点まで、私にはテーケイ博士と面談する計画はなかった。博士の著書・論文についていえば、『アジア的生産様式』および『マルクス・エンゲルの著作におけるアジア的生産様式』は一とおりに読んでいたし、その堅実な実証とユニークな発想に尊敬を覚えてはいても、そこに内在する諸問題、とりわけ近代にまたがる中国史に関しての新たな法則性の提言については、それが大きな問題性をはらんでいるものであることを、私は理解していなかった。私のテーケイ理解は、それが従来の“停滞論”に代表されるアジア的生産様式論者ではないということ、マルクスのアジア的生産様式に関してのテーゼを、かつてのスターリン的理解の歪曲から本道に復権させようとしている人であるということ、その程度のものでしかなかったからである。

それだけに、そのような私が、ソ連での現地調査の帰途、当初の予定にはなかったブダペストへの道を選んだのは、出発に先だって開かれたさきのシンポジウムにおいて、平田、福富両教授のテーケイ理論の意義と独自性についての発言に接し

たことによる。平田教授は、こう言ったからである。

「この書物（前記『アジア的生産様式』……注）で私が非常に関心を持ちましたのは、一口で言えば、まず第一に、テーケイが西欧史での古典古代以前の過渡期で停滞した生産様式と、西欧資本主義の侵略まで続いた東洋諸民族の停滞的な生産様式とを、ひとまず区別して、東洋とくに中国に固有な発展の道を探究していることであります……。

もう一つは、アジア的生産様式の問題を議論するのは、中国においてこそ適當だ。インドの場合には古くからイギリスとの関係があり、それによる変容の問題があるので、中国の場合のほうがそういうものがないだけに純粹に検討できる。あるとすれば、それは北方との関係の中で出てくるので、それ固有に取り上げられる。アジア的生産様式の問題は中国において取り上げられてよい。これは30年代の問題のちょうど基底になっていると思われます。これはいろいろ革命戦略という具体的な問題も一緒にあるかと思いますが。現在そういう中国社会あるいはそこにおけるアジア的生産様式の発展の可能性を追求するとき、私の先ほど申しましたような意味で、私的契機があり、階級的契機があるということが、確認されてよいとテーケイを読んで感じる次第です」

平田教授のこのテーケイ理解は、テーケイ理論の真髓にせまるものであり、それゆえに、この理解をおし進めていったとき、そこには社会主義の

中国的発展の特質、独自性を考える上での重要な示唆をも提示している——私はそう考えざるを得なかった。私は大きく蒙を啓かれる思いがしたのである。なぜなら、平田教授はつづけてこうも言ったからである。「……奴隷制ということについては、中国では西ヨーロッパ的意味での奴隷制は成立していない、という主張が彼の立論です。（彼においては）農工一体という基本的規定性があって、ここに変転の世界の動揺を最終的にささえくいとめる基礎がある。しかし同時に、他面では、私の言葉に直しますと、共同体と共同体との間、大きな国家と国家との間の緊張、北方からの移動あるいは西方への展開、そういうことの中の巨大な再生産の過程の中に、彼は中国史を押える視座を置いている。そういう意味では、従来のあるいは戦前の停滞論に要約されるようなアジア的生産様式論ではないというふうに彼の所説を受け取りました」と。

私がテーケイに、強くひかれるようになったのは、まさにこの時からであり、改めて『アジア的生産様式』、とくにその第三章〈アジア的生産様式と中国社会の諸問題〉を読み直すとともに、このような立論を可能にしている彼の思索とその思想的土壌とを、より深く知りたいという衝動にかられたのであった。どだい、中国の歴史を、その歴史時代＝階級社会の時代全体をとおしてアジア的生産様式によって特徴づけ、そのような枠組みの中で、歴史発展の諸段階を類型化するという方法は、同じくアジア的生産様式をもって中国社会を特徴づけたとはいえ、かつてのマジャールなどとは根底的に異なっているのであり、テーケイの場合、まずこれをマルクス・エンゲルスの所説（とくに『資本論』、『資本制の生産様式に先行する諸形態』および『ドイツ・イデオロギー』）の精緻をきわめる

論証にもとづいての論理の帰結である点、第2に、無階級社会から階級社会への移行（過渡期）において、これが現実の基本的な生産関係として生きているというとらえ方は、逆に階級社会から無階級社会への移行においてすら、同様の作用をおよぼさざるを得ないであろうことを示唆し、展望している点において、社会主義の現代中国のもつ意味、その特質をも視座に入れていたからである。そして実際、後者の問題についていえば、彼はこう書いているのである。

「過去の『アジア的遺産』のいくつかの特徴は、いまやすべての基礎を、うばわれたにもかかわらず、まだ、粘りつよく、今日でも中国社会に生きている。これらの残滓にたいする戦いは、まだ長いこと、中国の共産主義者にとって重要な課題でありつづけるだろう。中国共産党もこのことをよく知っているはずである」

私は、ソ連・東欧の旅に出る以上、どうしてもテーケイに会わねばならないと思った。

II

テーケイ博士のすまいは、ブダペストのブダ地区 Felvinci út. の樹木に囲まれた、静かな住宅地にあった。この辺りは、日本でいういわゆる山の手にあたり、博士のすまいからほど遠からぬところに、有名なマティアス寺院や旧王城があり、ペトフィ・クラブを思わせるような芸術家・知識人の集まるという雅叙園があった。

博士は、私どもの訪問を心から歓迎してくれ、私どもの来意が、博士の『アジア的生産様式』に関しての日本における受け取り方、および博士の理論体系に存する問題点に対しての質問にあることを知って、卒直な関心を寄せられた。私はあらかじめ提示しておいた質問の要点を改めてくり返

し、アジア経済研究所におけるシンポジウムでの問題点と、そこでの討論の空気をかなり詳細に伝えた。博士は、そのいちいちをメモしながら、平田、福富両教授のことは書物をとおして知っているといわれ、本田喜代治教授のことについても触れられた。そして、まずこう言われたのである。

「私が、中国や日本、またアジアのことに興味を持ち、研究を始めるようになったのは、いままで論理のないといわれていた世界を、マルクス主義の理論によって論理化したい思いにかられたからです。これには、ハンガリーがアジアであること、正確にはアジアと同質の社会構成をもっていたことが大きく原因しています。かつて、＜アジア的生産様式＞を語ることは、それが否定的概念、すなわちアジアを停滞的、進歩のないものとして見ることの代名詞でありました。そして、ヨーロッパや日本は、この概念を自己の植民地支配の必要性から十二分に悪用しました。このことは、近代社会はアジア的社会を犠牲にして成り立っていることを示しています。

しかし、＜アジア的生産様式＞とは、本来そのようなものではありません。これは歴史発展のある段階の社会構成を示すもので、類型として見るならば、原始共同体的生産様式と古代的生産様式の中間に立つ過渡的形態とでもいうべきもので、マルクスのいう“総体的奴隷制”のカテゴリーに含まれるものです。一言でいえば、“農耕共同体”の社会であります。そしてこの社会構成がアジアに相当期間、長く存続したために、これと原始社会、奴隷制社会、封建制社会と段階を区切って、順調に発展したかに見えるヨーロッパの資本制以前の社会構成との比較に用いられており、アジア的社会の特質を考える場合の重要な要因となっています。けれども、そうだからといって人類史の

発展過程においてアジアが、ヨーロッパ的發展と敵対しているというわけではなく、ましてやアジアの停滞性を説明する概念ではまったくありません。マルクスは＜アジア的生産様式＞を、ヘーゲルのようにアジアの後進性や停滞性を説明するためには、決して用いませんでした。たしかに、マルクスは社会発展の歴史形態の差異を、アジア的、スラブ的、ギリシヤ的、ゲルマン的などのタイプに分類していますが、これは民族的、自然的、地理的相違にもとづく当然の差異と把握したからであり、ヨーロッパ的な、厳密な意味での奴隷制、封建制をあらゆる民族、地域に普遍的なものとは考えてはいないのです。私は＜アジア的生産様式＞に関する1930年代の論争の結果にかんがみ、このことを改めて検討しました。アジアの再発見——これが私のもくろみであり、従来の＜アジア的生産様式＞に対するスターリン的歪曲から、問題をマルクスにもどしたかったのです。

中国に関していえば、植民地化以前の中国の階級社会の全時代は＜アジア的生産様式＞によって根本的に特徴づけられており、この生産様式の枠内において奴隷制が生まれ、封建制が成立した、というのが私の考えです」

この見解は、一見してわかるように一般論であり、それだけに私にとっては予想されたものであったが、著者自身の口から、その＜アジア的生産様式＞論へのかかわりと、アジアへの関心の動機を知り得たことは、それがヨーロッパの学者にはなかなか見られない内容であるだけに、傾聴に値するものであったと思う。ハンガリーが真にアジアであるか否か、という問題は別の次元の問題であろうが、博士が以上のことを語った時のその真摯な対応のなかには、自らもアジア人であることを強烈に印象づけるものがあったことだけは、

確かであった。博士は、解放後の中国を2回訪ねたことがあるといい、自身の実感は正しかったと笑っておられたのである。

そこで、私は第2の質問に移った。それというのは、博士のいうアジア的生産様式が「過渡的構成体」であるという見解に関連して、これをなぜ第1次的構成体にいれないのか、また、「枠組み」あるいは「枠内」という概念はユニークな規定であるとしても、そのような概念はマルクスの『諸形態』から演繹できるものであるのかどうか、ということであり、さらにアジア的生産様式に規定された社会内部の社会編成と階級構造はいかなるものであったと理解されているか、といった意味のものであった。もちろん、この質問は私の発意というよりも、さきのシンポジウムにおいて福富教授が提起された疑問をそのままに出したものであって、福富教授はテーケイの見解には、第1次的構成体と第2次的構成体との区別が「あいまい」であることを、くり返し述べられていたからである。私はこの機会に、これを福富教授へのお土産にしたいと思ったのである。

しかし、これに対する博士の答えはきわめて抽象的で、かつ難解をきわめ、私の知見をもってはどうも捕捉できず、それが反映して私のノート、メモは難解な単語のら列でしかなく、いまなおこの部分は整理できない有様である。ただ、わずかに理解できたことは、第1次的構成体に含められぬ理由を聖書＝バイブルに求め、バイブルに盛られた世界は第1次的構成体でないこと、そこに盛られた社会編成は「自然発生的生産共同体」であろう、といわれたことであった。そして、「枠組み」という概念については、これをルカーチの使用した仮説(?)に拠ったという意味のことをいわれたのである。話は、ギリシャ神話からミケーネ文

化に飛び、宋代の伝誦にまで及んだのであり、その該博な教養に、私はついていけなかったのである。この点、福富教授にお詫びしておきたい。

だが、それにしても、従来、ともすれば“停滞論”と同義語の意味でしか使用されることのなかったアジア的生産様式が、博士の手になると社会発展の典型的な契機として普遍化され、全人類的发展の諸契機に対応するものとされるのであるが、問題は、これが中国社会に典型的にあらわれたのはなぜなのか、ということであろう。私は第3の質問として、この問題を提起してみた。と同時に、日本と中国との関係と相違についての博士の見解が、その後、大きく変化していることに対して、その根拠が何に由来するのかをたずねてみた。博士の答えは、こうであった。

「中国はヨーロッパに数百年も先行する歴史を持っており、歴史で証明し得る範囲をもっとも広く持っていた国であったと思います。しかも同一種族の土地所有を基礎とした共同体の集合国家でありました。このことは周王朝において、本来的な意味での土地の私有がなかったことによく示されており、王権は共同体の代表者であるという意味でしかなかったのです。官僚にしても、生産と公共事業の管理をおこなう機能しかもたず、生産と労働の本質的部分はあくまでも村落共同体の全成員が責任を負うという体制であり、そこには役割の違いによる階級はありますが、農民がいっさいを代表者のために隷属したという事実はありませんでした。つまり、私のいう周代奴隸制否定の論拠です。そして、その後の中国の歴史は、形式的にはさまざまな社会構成を経たとはいえ、この時代に確立した基本的な生産体制は、唐代の奴隸制、明・清のあきらかな封建社会にいたっても、決して消えることがなかったのです。

それでは、ヨーロッパから見ての中国の停滞が、このような生産体制のせいであったかといえば、そうではありません。中国はこのような生産体制を基本にしながら、時代の要求に合致した支配形態をつくり出しています。商人階級が勃興した時代には、共同体の代表はこれと巧みに結びつきまし、商人のちからを共同体の拡大と内部の繁栄と発展のために利用します。ご存知とは思いますが、中国の初期資本主義はヨーロッパにおける発展よりも数百年も早く生まれています。しかし、それはあくまでも農業社会とのバランスのなかにおいての発展でしたから、ヨーロッパ的な発展にはならなかったのです。いいかえれば、中国の場合、いかなるものであれ、『共同体の臍の緒』から分離できなかったといえると思います。私が、中国をこの生産体制、利益共同体の“典型”と見るのは、このためです。しかし、同時に、不完全ながらも、この体制の枠内ですべての、ヨーロッパ的發展段階をも経験してきたということでは、全人類の発展の諸契機に対応していると考えられるのです。同様のことは、中国の共産主義者による近代以後の革命の過程にもはっきりとあらわれています。だが、これについてはすでに述べましたし、私の本の中にも触れています」

話がここまでいって、私どもは博士が大変疲れていることに気づいた。考えて見れば、対話がはじまってすでに4時間がすぎており、通訳をまじえていたとはいえ、語り続けの連続は病み上りの博士にとっては、相当にこたえたのかも知れない。私どもは小休止の意味でワインを上げ、博士の健康を祝ったが、その時の雑談では、博士は11月末、東京で開かれた海外日本研究会議に招聘されていたとの由、健康がすぐれないため断念したとのことであった。ちなみに、博士は1930年生れ、43歳

とのことであった。

私は暮色の深まりゆく窓外を眺めながら、いかに逸才とはいえ、このような若さを学界の重鎮（博士は1969年以来、ハンガリー科学アカデミー哲学研究所長である）にすえているハンガリーの社会主義というものに、深い感慨を覚えざるを得なかった。

III

ところで、博士の『アジア的生产様式』には、「日本の土地所有形態によせて」という副題のついた著者あとがきがあり、前章の中国の項で部分的に日本に触れて、中国からの圧倒的な影響を受けながらも、日本では中国におけるようなアジア的生产様式が「根を下ろすことができなかった」との前説を訂正している。この訂正は、“あとがき”によれば、1960年以来つづけてきたマルクスの基本構成体論の再編成作業（のちに、これは『社会構成体の理論について』として完成）の結果によるというのであるが、われわれとして想起せざるを得ないのは、この時期に前後して本田喜代治教授によって提起された博士への批判であろう。本田教授の疑問は、これを一言でいえば、中国社会の発展史についてはテーケイの見解は正しいかも知れぬが、マルクスのカテゴリーにおけるアジア的生产様式は、日本の社会にもあてはまるのではないか、というものであった（『思想』1966年3月号）が、問題は、本田教授のこの考え方を博士はどう受けとめているかということであった。博士は、つぎのように語ったのである。

「私の見解が変わったのは確かですが、これと本田教授の批判とは直接の関係はありません。私の見解の変化は、“あとがき”でも述べているように、マルクスの基本構成体論の再構成作業の過程で、帰結的に出てきたことでありました。私は中

国社会の論述をおこなってから約10年近く、日本の天皇制に多大の興味をもって研究を進めてきましたが、その結果、判明したことは、領主的封建制と考えられていた日本の社会構成が、実はきわめて擬似的なものであり、実体は幕府的官僚による土地占有を基礎とした共同体的規制が存在していたということでした。したがって、一見、中央集権的秩序を保持していたかに見える天皇制は、中国史の発展の中で見られた擬似的封建制とほとんど変わらないものであるということがわかったのです。もちろん、日本の場合、伝統的に家父長的権威を求める動きはつねに生起しましたし、明治革命が結局のところ、フランス革命と異なることは、“天皇の復権”に象徴的に示されているわけですが、これは一部の、形式的なあらわれ方にすぎず、これをもって所有関係においてそうであったとか、家父長的秩序においてそうであったとは、あきらかにいえるものではありません。『源氏物語』の院政を見るまでもなく、日本の天皇が専制封建君主として国家権力の頂点に立ったということはない、と思います。武士のハラキリにしても、これは種族共同体内の秩序違反の結果の行為であり、真の意味での封建制を語る証明ではないと考えています。私はむしろ、ハラキリよりも“恩”とか“義理”という日本人特有の思想の中に、種族的・農工一体的の共同体の基本関係を見るべきだと思うようになりました。ということは、中国のギルド共同体の観念や、いわゆる“面子”の習俗が、変型した形で日本に生きている証明だといえるのではないのでしょうか。

したがって、本田教授の話にもどりますと、私は本田教授の論文を読んで大変多くの示唆を得、いままで知らなかった事実を学びました。感謝しております。私は今日の中国が、私が考えている

意味での“アジア的遺産の残滓”とたたかいつづけていることと同じく、日本の進歩的歴史家がこれとの戦いに苦闘していることを知っており、敬意を表しています。ハンガリーについても同じことがいえるからです。しかし、私は日本の問題のすべてのことで本田教授と意見が一致しているわけではありません。たとえば、歴史哲学の面ではずい分違うと思っています」

このあと、話題は羽仁五郎氏の諸著作、とくに最近の『都市の論理』を読んだ感想のことから広い意味での博士の日本観、および現代中国に生起している諸問題についての見解、とりわけハンガリーの党の立場を中心とした文化大革命、中ソ論争観など、きわめて今日的な、私にとってはもっとも興味のある問題へと移行した。そして、羽仁氏のことにかぎっていえば、博士は羽仁五郎氏の諸作から多大の影響を受けたといい、「もっとも尊敬している日本の歴史家」という表現をされた。これは、すでに福富教授が指摘されているように、博士の前述の日本に関する旧見解が、羽仁氏の主として『日本人民の歴史』に多くを負っていることを考えるならば、当然の見解であると思われる。けれども、『都市の論理』についていえば、明らかに誤解をされておられたし、日本的共同体的指向がこれに結実しているかのような認識をされておられた。これは、やはり問題のある点だと感じられたので、私どもなりの理解を率直に伝えておいたが、どこまで説得的に話せたかは自信がない。博士は、日本の研究者としては羽仁協子氏としか深いつき合いがないといわれ、これを機にいつその交流を深めたいと結語されたのである。

ともあれ、博士との以上のような長時間にわたる面談をとおして、私自身はその雄大なまでのア

アジア史再構成の構想に立った、博士の中国・アジアへの学的探求の情熱とエネルギーに、真実、圧倒されてしまった。抜群の記憶力とマルクス主義の真諦の理解に達している洞察と分析力、知的に、また美的に洗練された表現力——これらは、どれ一つとっても私などのとうてい得難がたいものであり、いつまでも印象に残るものであると思う。にもかかわらず、私自身として残念であったことは、博士が、中国の問題にせよ、日本の分析にしろ、具体的に一体どのような材料・資料をもって、あのような論理を構築されているのか、そのことに議論を進められなかったことであり、史資料批判のクライテリアをどこに求められているのか、を聞くことができなかったことである。時間がこれ以上許されなかったのであった。帰国して、シンポジウムの第2回目が開かれ、そこで佐伯教授が同様の疑問をもたれている意味の発言をされたことを聞くにつれ、その感はいっそう禁じ得ないのである。ただ、私の記憶にあるのは博士の書齋を埋めていた漢籍の山であり、これが一つの答えになっていたことである。

最後になったが、このように、私にとっては、実にみのり多い博士との会見に多大の関心を示され、その実現のためのあっせんの労をとってくださった、在ブダペストの畏友池田博行教授をはじめ、在レニングラード日本総領事館の東領事、在ハンガリー日本大使館の堀田一等書記官、および通訳を引きうけてくれたS・ピーター氏に深く感謝したいと思う。池田教授は博士との会見に同行してくれたばかりか、積極的に討議に参加してくれたのであった。私が本稿において「私ども」という言い方をしたのは、池田教授を含めていたからである。なお、ついでながらテーケイ博士の現代中国論、とくに文化大革命観を中心とした国際

情勢に関する見解については、近刊の『アジア調月報』（毎日新聞アジア調査会刊）に紹介したので、参考にしていただければ幸いである。

（調査研究部）